

「未来知」——新たな価値を創造する

——キーワードの「未来知」ですが、具体的にはどのようなものですか。

学長 少し耳慣れない言葉かもしれませんが、例えば一九七九年に登場したソニーのウォークマンの出現によって、音楽は従来の聴き方からいつでもどこでも楽しむものへと変わりました。これは、新たな知や製品によって、

金沢大学として未来ビジョン「志」の中でも研究を最も高く位置づけています。がん進展制御研究所は約六〇年の歴史を持ち、国立大学で唯一、がんに特化した研究所です。さらに共同利用・共同研究拠点になっています。また、二〇一七年に文部科学省「世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI-I）」に採択され、設立したナノ生命科学研究所（WPI-NanoISI）では、世界最高レベルの原子間力顕微鏡技術を開発し、それを使ったさまざまな融合研究が進められています。

## 「文理医融合」の切り口で研究拠点群を育む

さらに、本学らしい挑戦として、医学と考古学を融合した研究を行うサピエンス進化医学研究センターがあります。骨サンプルからDNAを取り出しゲノム解析を行い、人類の進化や現代の病気との関わりを探っています。観光分野では、先端観光科学研究所で、障がいのある方の移動支援など全ての人がいつでも安心して観光を楽しむことができる社会を実現するため、デバイス開発から都市政策までを含む「文理医融合」の切り口で研究を進めています。本学はこうした学際研究が育ちやすい環境があります。

研究を支える基盤整備として、若手研究者

プレベルの研究拠点群を拡充すること。第二に、国際社会のリーダーとなる「金沢大学ブランド人材」——私は一言でいうと「志を実現するタフな人材」と表現しています——を輩出すること。第三に、人・知・社会の好循環をつくり出す持続可能で自律的な大学運営・経営の実現です。

この「あるべき姿」からバックキャストし、今、何をすべきかを示したものがミッションです。全部で二七ありますが、重点ミッションを三つ挙げると、一つ目が「大学院の飛躍的な機能強化」。大学院は研究と教育の両面を担います。二つ目は「世界的視座による優位性・独自性のある研究分野の育成・先鋭化」です。研究大学として基礎研究を大切にし、さらに異分野間の融合研究を進めていきます。三つ目が、それを社会につなげる「全学を挙げての実証研究の展開」です。

未来ビジョン「志」を二〇二四年にバージョンアップした際には、二〇二四年一月に発生した能登半島地震からの復興に寄与するためのミッションとアクションも入れました。

## 学長インタビュー

国立大学法人  
金沢大学

和田隆志学長

オール金沢大学で新しい価値を創造し続ける

わだ・たかし 1988年金沢大学医学部医学科卒業、1992年同大学院医学研究科博士課程修了 博士（医学）。2001年金沢大学助手、2007年同教授、2016年同学長補佐（研究戦略担当）、2018年同医薬保健学域医学類長、同副学長（研究力強化・国際連携担当）、2020年同理事（研究・社会共創担当）・副学長などを経て2022年4月より現職。

国立大学法人金沢大学は、1862年（文久2年）に創設された加賀藩彦三種痘所を源流とし、旧制第四高等学校、金沢医科大学、石川師範学校、金沢工業専門学校などの前身校の歴史と伝統を受け継いでいます。金沢大学憲章「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という基本理念に立脚し、2022年に金沢大学未来ビジョン「志」を策定しました。このビジョンを不動の「北辰」（北極星）に見据え、現代の課題解決を先導し、未来の課題を探究し克服する知恵「未来知」により新たな価値を創造するとともに社会に貢献できる人材の育成を進めています。

今回のインタビューでは金沢大学未来ビジョン「志」を中心に、金沢大学の特色ある取り組みと大学運営・経営の方向性について聞きました。

## 揺るぎない未来ビジョン

——二〇二四年九月末に新バージョンが公表された金沢大学未来ビジョン「志」についてうかがいます。

学長 未来ビジョン「志」は、二〇二二年四月の学長就任後、翌五月に策定したものです。大学憲章に掲げる基本理念「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」の実現に向け、「オール金沢大学で『未来知』により社会に貢献する」という揺るぎない未来ビジョンを掲げました。「オール金沢大学」には、学生・教職員・卒業生に加え、本学に関わってくださるステークホルダーの皆さまと一丸になって、という思いを込めています。キーワードは「未来知」です。本学では「現在の課題を解決するとともに、未来の課題を探究し克服する知恵」と定義しています。言い換えれば、未来の新たな価値を創造する知であり、本学はそうした価値を創造し続ける大学でありたい。それが私たちの「志」です。タイトルの「志」・Aspiration、は私自身が筆で書きました（図）。

目指すべき未来ビジョンを不動の北辰（北極星）のように明確に示し、オール金沢大学のベクトルを合わせていくのも私の仕事です。「北辰」は、前身校の一つである旧制第四高等学校の校章になっており、本学の中央図書館の吹き抜けにもデザインされています。このビジョンの下で掲げる「あるべき姿」は三つです。第一に、研究大学として世界トッ



図 学長揮毫による題字

います。起業前には、本学の研究として、能登半島の珠洲市とも連携しており、能登半島地震からの復興にも生かせればと思います。

こうした挑戦が新しい価値となり、実現すればそれはもはや「未来知」から新たな日常や常識になります。私たちはさらにその先の未来の価値を生み出し続ける大学でありたいと思っています。



支援やコアファシリティにも力を入れていきます。学内の共用分析装置などを学内はもちろん、学外も含めて利用できるようにし、研究

## 「非連続なイノベーション」を創出し続ける

——J－PEAKSの取り組みについてうかがいます。

学長 本学は二〇二三年十二月に文部科学省「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J－PEAKS）」に採択され、文理医融合による「非連続なイノベーション」を創出し続ける世界的拠点の形成を目指しています。「非連続なイノベーション」とは、これまでの延長線上にない新たな価値の創造と定義しています。基礎研究・融合研究の高度化と社会実装の最速化に全学で取り組んでいます。

二つの拠点の整備が進んでいて、宇宙理工学研究拠点では、宇宙物理学と材料科学が結びついています。二〇二三年に学生と教員が一丸となって開発した衛星「こよう」が打ち上げられ、現在は金沢大学衛星二号機「IM PACT」の開発を進めています。

ライフサイエンス系研究拠点では、脳科学、考古分子生物学、老化科学などの研究者が一堂に会し、新たな融合研究の種が生まれています。

### 人・設備・資金を連携させる

学長 この流れを社会実装につなげるために

人間力を高めて限界を超えて挑戦するという姿勢ですね。

実際にタフな学生が多いと感じています。二〇二三年のG7広島サミットに伴い本学で開かれた「教育大臣会合」のエクスカージョンでは、各国の大臣級の方々の前で学生、大学院生、留学生が「教育の未来」について発言し、大学院生が教育の未来に関する「金沢大学ユース宣言」をまとめました。物怖じせず議論し、会合後も交流を続ける姿に、多くの方から「学生を誇りに思ってよい」と言っていたきました。私自身も誇りに思っています。学生にとっても大きな自信になったはずです。

### 一人一人の成長をかなえる学びの環境

——入試や学びの仕組みはいかがですか。

学長 本学の学士課程は「学域学類制」を採用しており、四学域・二十学類あります。そのうち文理医融合の学びを体现するのが融合学域です。

入試は特別選抜と一般選抜があり、入試段階からKUGSの考え方を取り入れた「KUGS特別入試」も実施しています。本学はさまざまな特別選抜入試制度を設けているのが特徴です。

併せて従来より重視しているのが「経過選抜制（レイト・スペシャライゼーション）」です。文系・理系一括入試では、入学後の一年間、幅広い分野について学んでから、学類や専攻を選ぶことができます。

のスピードと質を高めています。この取り組みは国の「コアファシリティ構築支援プログラム」にも採択されています。

整備したのが、二〇二五年七月に本格稼働した「未来知実証センター」です。自由に交流・議論できる空間として設計され、インキュベーターやキャピタリストも関わり、スタートアップ創出の場として機能しています。

資金面では、二〇二四年一月に本学と北陸先端科学技術大学院大学が主幹機関として採択されたスタートアップ創出プラットフォーム（TeSH）にGAPファンド等を設けています。

さらに国立大学として初めて自己財源一〇

## 志を実現するタフな人材——「金沢大学ブランド人材」

——特色ある教育について、先ほどお話にあった「金沢大学ブランド人材」を育成する取り組みについてうかがいます。

学長 「金沢大学憲章」に「学生の個性と学ぶ権利を尊重し、自学自習を基本とする」とあります。この理念のもと、「国際社会の中核的リーダーたる金沢大学ブランド人材」、すなわち志を実現するタフな人材を育てるのが目標です。

その指針として、教育全体を俯瞰して見て

### 女子学生比率40%超 学士課程で実現！

学長 理工学域で女子枠特別入試を拡充したところ、全学で女子学生比率が四〇％を超え、注目されました。ダイバーシティを尊重するというメッセージが伝わったのだと思います。

さらに高等学校、大学、大学院から若手研究者への接続にも取り組んでいます。附属学

## 大学院でリベラルアーツ——尖った専門分野が会う

——大学院教育の取り組みについてお話いただけますか。

学長 専門性を積み上げることに加えて、本学の特色の一つが、大学院でのリベラルアーツ教育です。数理・データサイエンス・AI等の基礎的素養に加え、尖った専門同士の出会いそのものもリベラルアーツと捉えています。ラボローテーションで他分野の最先端に触れ、研究の見え方を変える。こうした考え方をかたちにしたのが「ナノ精密医学・理工学卓越大学院プログラム」です。理工学が分かる医学系研究者、医学・医療が分かる理工系研究者を育てています。

この流れをさらに拡大強化していくのが、二〇二五年九月に採択された「未来を先導する世界トップレベル大学院教育拠点創出事業（FLAGs）」です。総合型の一つに本学が選ばれました。

〇％出資のベンチャーキャピタルも二〇二三年に設立しました。研究の種に資金をつけ、目利き人材も揃えることで、人・設備・資金を連携させています。この仕組みのもと、認定ベンチャーも八社立ち上がっています。自動運転の「株式会社ムービーズ」に加え、最近では能登で新たな水産業の展開を目指す「能登アクアファーム株式会社」など、研究成果を社会に届ける動きが具体化しています。私はよく、基礎研究の土壌を肥沃にし、そこから高い頂をつくるイメージを「富士山」に重ねて話します。ただ本学が目指すのは単峰ではなく連峰のような、「研究拠点群」です。J－PEAKSのSにも複数の山（連峰）の意味があるとうかがっています。

基礎研究から段階的に事業化まで進んでいく仕組みを整えるとともに、そこに魂を入れることに注力していきます。

いく仕組みを整え、金沢大学ハグローバルスタンダード（Kanazawa University “Global Standard”：KUGS）を定めました。学生が卒業・修了までに身に付けるべき能力として学士課程で六つ、大学院課程で四つの能力を示しています。

志を持ち、新しい取り組みを進め、実践するには、課題を自分で見つけ、チームをつくり、できない理由をさがさずに壁を越えていく力が必要です。これが私の言うタフさです。

校園を含め、小中高大院を見通した一貫した発想で、学びと進路を接続します。小中高型のSTELLAプログラムも行い、初等中等教育からの接続を意識しています。

博士人材育成を推進する一方で、大学院進学後のキャリア支援に加えて、博士号取得後三年間を特任教員として雇用する「プロミシング・リサーチャー制度」など、支援の仕組みを用意しています。これまでに一三名が利用しています。

徹底した産学連携と国際化を背景に、将来像からバックキャストして、博士課程教育を産業界や国際社会へ開き、開放的で共創的な大学院教育へ変えていきます。

博士人材の支援としては、国による博士学生支援事業による採択を得て、博士研究人材支援・研究力強化戦略プロジェクト「HaKase+（ハカセプラス）」において、本学独自の支援を組み合わせながら、経済面、キャリア形成面をトータルで支える仕組みにしています。

### 国際が日常にある

——国際化の取り組みはいかがですか。

学長 一〇年間の「スーパードグローバル大学創成支援事業」の取り組みによって、TOEIC七六〇点以上の学生数が大幅に増え、



キャンパス全体の英語力も底上げされました。二〇二四年に採択された「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」では三本柱を掲げています。第一に、国際が日常にある、日常が国際であるようなキャンパスづくり。そのために、留学生の増加に力を入れています。第二に「文化」を軸にした「多文化共修」。国際的な視野から日本を研究し、日本文化を教える「国際日本研究教育センター」を設け、日本人学生と留学生がともに学ぶ「多文化共修」を進めています。第三に「大学の世界展開力強化事業」も踏まえた国際ネットワークの強化です。海外リエゾンオフィスは三〇カ所に拡大しました。さらに学生や教職員に「他流試合」として海外での研さんを勧めています。私自身も留学することで見える風景が変わりました。

金沢は文化都市、学術都市として国際的にも知られ、学びの場としての魅力があります。そこに大学としての教育資源を重ね、相互にWin－Winのかたちをつくりたいと考えています。

## 自由な環境をつくる

――学生の「自学自習」の学びを支える環境づくりについていかがいます。

学長 教員・職員・学生がチームを組む取り組みも進めています。学長就任時に設けた「改革戦略室」からプロジェクトのアイデアが次々に出てきています。

例えば、コロナ禍で使われなくなったス

を守ることを軸に、取り組みを進めています。

これまで多くの学生・教職員が現地に入り、ボランティアや学術調査、医療支援など多様な活動を行っています。避難生活が長期化するほど心の問題は深刻になるため、医療関係者、公認心理師、学校の先生方とも連携し、心のケアにも注力しています。学生も非常に頑張っており、自主的な参加者は累計で二二〇〇名を超えています。

これらの活動は定期的に広く報告する機会を設けています。例えば、二〇二五年九月に開催した「日経地方創生フォーラムin金沢」では、こうした支援の取り組みや現地の情報発信も行いました。

## 創造的復興へ

学長 センター発足から一年間の活動を踏まえて二〇二五年四月から、未来創造部門、ひとづくり部門、まち・なりわいづくり部門の三部門に改組しました。

未来創造部門が全体の窓口として地域のシーズ・ニーズの分析、教職員の能登での活動や他機関等との連携を推進しています。

ひとづくり部門では、分野横断の学びで防災・復興に携わる人材を育てます。二〇二五年度入試から、KUGS特別入試「防災・復興人材選抜」を開始し、二〇名が入学しました。また、在学者向けの正課教育として「防災・復興人材特別プログラム」を開始し、一〇〇名を超える学生が参加しました。

このプログラムは学生の関心が高く、将来

ペースを、学生が集まれる場所に変えました。フードコートを整備し、交流スペースにしました。落書きも自由にし、私が真っ先に落書きしました。こうした自由な環境が、学生の発想を促すと思っています。

学長になってから、学生と一緒にどうしてもやりたかったことが二つあります。一つが共通教育科目「未来デザインプラクティス」です。「自分と未来は変えられる」をテーマに、自分の未来、社会の未来、大学の未来を自分でデザインし、失敗してもいいから実践してみる。集中講義で提案を受け、単位として認定しています。良い提案とその実践には予算を付け表彰も行っています。

震災時には留学生向けの防災減災パンフレットを英語でつくった学生チームもいました。本学には留学生が約一二〇〇人おり、六〇数カ国から来ています。国旗をキャンパスに並べてウェルカムな雰囲気をつくるプロジェクトもあります。これらは学生が自分で

## アカデミアとして「文化」の薫る地域を守る

――能登の創造的復興に向けた取り組みについていかがいます。

学長 二〇二四年一月一日に令和六年能登半島地震が発生し、ただちに災害対策本部を立ち上げ、対応しました。一月三十日に「能登里山里海未来創造センター」を立ち上げました。これは復旧に加えて、中長期の創造的復興・再建に向け、アカデミアとして行動する

的にはオープンバジジ化して、より多くの学生が学べる仕組みにしたいと考えています。

まち・なりわいづくり部門では「生命(Lives)・生活(Life)・生業(Living)」の三つのLを軸に研究を進めています。

珠洲市では災害時にも一定期間自立できる「オフグリッド住宅」やコミュニティを構築す

## 「金沢大学で学んでよかった」と思ってもらいたい

――最後になりますが、学長として大切にしていることについていかがいます。

学長 私は、人こそ宝、財産だとの信念を持っています。学生と教職員とともに前向きに進みたいと思っています。そのために対話を重視し、部局や研究所などを回って、大学の目指す方向を説明し続けています。学生ともよく話し、大学院生や留学生とも定期的に対話をしています。

突き詰めれば「金沢大学で学んでよかった」と思ってもらえる大学であり続けたい、ということに尽きます。

## ワクワクが人を集める

学長 私は学士課程の一年生全員に講義をし、「金沢大学へようこそ」「私たちや金沢大学は、皆さんの洋々たる未来に向けて背中を押します」と伝えています。講義の後半は質問コーナーにしており、平均すると七、八件は質問が出ます。最初に手を挙げた学生には

考えて自ら動いてくれました。

## アイデアは雑談から生まれる

学長 もう一つが交流事業「雑談のチカラ」です。「偶然の出会いを必然に」をテーマに実施しています。コロナ禍を中高時代に経験した学生はコミュニケーションの機会が限定されていた。彼らにも、人との出会いを大切にして、雑談の楽しさをぜひ知ってほしいと思います。なにげない雑談の中からふとひらめき、アイデアが生まれ、人と人がつながっていきます。これは研究でも同じではないでしょうか。

この取り組みでは各界で活躍されている有識者の方々に来学いただき、これまで五〇回ほど開催しました。学生と交流したいとおっしゃってくださる方が多く、今では開催までお待ちいただくこともあります。ただし就職活動の場にはしません。あくまで雑談です。

ためです。

能登には従来から本学の教育・研究拠点が設置されており、地域の方とともにさまざまな活動を進めていました。能登には輪島塗や珠洲焼、奥能登の「あえのこと」、キリコ祭りなど、有形・無形の文化が息づいています。そこで活動のベクトルを合わせる中心理念として「文化」を掲げました。文化の薫る地域

る試みを行っています。能登のシンボルである見附島にちなんで「未来知MITSUKE（ミツケ）プロジェクト」として展開しています。将来的には、住みながら健康になれる家・コミュニティを目指します。家にいるだけで健康モニタリングができる仕組みの導入も計画しています。

「最初に質問するのは勇気がいる。その勇気を称えたい」と言います。学生が一步踏み出すきっかけをつくることも、大学の大切な役割だと思っています。

また、先日も若手研究者と二時間みっちり議論しました。節目ごとに現場と対話をし、「自分自身もワクワクしながら、学生や異分野の若手研究者と一緒に研究してほしい」と伝えていきます。

研究でも、教育でも、ワクワクしながら取り組んでいるところ、心地よいところに人が集まると思います。大学としてできるだけ支え、研究者には自分の研究の面白さを外に届けてほしいと思っています。

研究が面白かった、学食が美味しかった、先生の講義はジョークが面白かった――など、トータルとして「金沢大学に来てよかった」と思ってもらえる大学であり続けたい。学生も教職員も、そして本学に関わってくださるさまざまなステークホルダーの皆さんとともに、その思いで前に進んでいきます。■